

メキシコ研修生の受け入れの記録

工業デザインプログラム

富山大学芸術文化学部 松原博・矢口忠憲・内藤裕孝



1. 本事業の経緯

1) 日墨交流計画とは

エチェベリア・メキシコ大統領（当時）による提案に基づき、日本とメキシコ（墨）の研修生・学生等の交流計画を通じて両国の友好関係緊密化に文化交流に貢献するものとして、1971年に合意されたものである（正式名称：日墨研修生・学生等交流計画）。以降これまでの研修実績は、双方合計で3000名を超えており、現在は毎年双方50名ずつの枠で実施中である。

2) 研修実施に関するJICAの考え方

本事業は日本側においては、独立行政法人国際協力機構（JICA）を実施機関とし、政府開発援助（ODA）の一環として事業を運営されており、日本とメキシコ間の国際約束に基づいて企画され、研修員が募集されており、その目的はODAの考え方に則り、来日するメキシコ人に対する研修を通じてメキシコ国の経済・社会の発展に寄与することとされている。

この様な考えから、研修員の選考に関しては専門知識や技術の有無はもちろんのこと、本事業の意義を充分理解していることなど人物審査も厳選に行っているとのことである。そのような背景から、美術・デザイン・工学系大学を卒業後数年の実務経験を持った人達が候補者として推薦されてくるケースが多い。

北陸JICAにおいては、工業デザインコース・コンピュータコース・国際保健薬学のプログラムが開設されている。今回本学が受託した事業は、その中の「工業デザインコース」としての研修員受け入れであり、2006年に次いで二度目となる。（これまでの、その他の受け入れ先としては、金沢美術工芸大学、石川県工業技術センター、富山県総合デザインセンターなどがある。）

3) 受け入れまでのプロセス

- ・日本側から募集要項の提示：受け入れ先（本学）が提供できるプログラム内容とその特徴、研修環境など
- ・メキシコで第一次選考した複数の希望者を日本に提示

- ・希望者の中から日本側で第一次選考し、候補者を決定
- ・候補者をメキシコ側で面接選定
- ・日本側最終選考、メキシコ側最終決定

2. 研修プログラムの概要

1) 研修コース名：伝統と革新

2) 研修目的

ミックスカルチャーと題し、日本と自国の文化の違いを比較分析し、双方の特徴や共通点などを通しデザインの本质を探る。その上でグローバルな視点でコンセプトを立案し、デザインングを行う。

3) 研修内容

対象領域は、インダストリアルデザインは広義にも捉えられるが、原則として対象をプロダクト製品とする。

進め方は、複数教員で指導にあたり、本学が提示するテーマによる課題6割／研修員の希望を取り入れたテーマによる課題4割程度を設定。

課題毎に複数回のプレゼンテーションを行う。定期ヒアリングは原則として一週間に1回とするが、必要や要望に応じ回数を調整する。

夏期休業期間を利用して短期研修ツアーを複数回計画し、日頃の近隣地域と合わせてリサーチ等を行う。

4) 全体スケジュール

- 3月上旬来日：オリエンテーション（大阪／全体）
- 中旬：日本語研修（大阪／全体）
- 5月上旬：金沢へ移動、開講式（北陸プログラム）
- 高岡へ移動
- 5月11日：研修開始（工業デザインプログラム）
- 8月5日：中間プレゼンテーション（東京／京都／直島等リサーチ）
- 11月5日：最終プレゼンテーション



5) 今回受け入れた研修員

◆ Mr. Guadarrama Favela Marco Antonio

メキシコの大学を卒業した後、スペインの大学院でインダストリアルデザイン（修士）を取得。その後1年間スペインに残り、引き続き修学。

◆ Ms. Isaak Trelles Fallon

メキシコの大学でインダストリアルデザイン（学士）を取得後、企業でプロダクトエンジニア・デザイナーとして4年間勤務。

3. 研修環境・支援体制

1) 施設・設備

研修員に対し、充実した質の高い研修を提供するため、以下の施設・設備を用意し研修環境を整えた。

- ・専用研修室（2名共同）
- ・個人用デスク / 軽作業用共有デスク
- ・ノートPC（IPアドレス貸与）
- ・アプリケーションソフト

Microsoft Office /Rhinceros/Autodesk Inventor /Adobe CS

- ・小型プリンター

また、指導教員の指導のもと、各種工作機械を使用し、プロトタイプの制作を行った。

2) 教員体制

前回経験者1名を含む3名体制とし、この3名による連絡調整会、さらに研修員2名を含む課題検討会を毎週実施し、研修のスムーズな進捗を図った。

3) チューター支援

研修員に対する支援体制として、研修期間中、選任した5名の学部学生（うち1名はモンゴルからの留学生で英語堪能）によるチューター支援を行った。チューターは、指導教員の指導のもと、モデル制作やPC操作の補助、日常生活面でサポートを行った。また、日本の生活文化や習

慣について紹介する体験プログラムを多数企画し、研修員との異文化交流を深めた。

チューターとして活動してくれた学生達は、親身になって様々なサポートを行い、プログラムとして組まれたチューター支援は延べ89.5時間にも及んだ。

4. 体験研修プログラム：学外調査・日本文化体験

研修員2名は、具体的な研修課題（後述）展開に対する情報を収集するため、さまざまな場所へ行き、学外調査を実施した。また、日本文化の理解を深めるため、祭りや伝統行事、工芸ワークショップ等に参加した。学外調査は大別して、次の4つの視点から行った。

1) 日本の伝統工芸技術の把握と理解

日本の伝統的な技法でもって作られる各種工芸品を素材、技法、造形の側面から調査し、伝統的な工芸技術と日本文化との関わりについて理解を深めた。

（主な調査先）

- ・(株)老子製作所：高岡市／銅器
- ・井波彫刻：南砺市／欄間・仏像
- ・桂樹舎：富山市／和紙
- ・(有)清甫：京都市／京人形
- ・御弓師 柴田勘十郎：京都市／京弓

2) 日本の先端的製造技術の把握と理解

先端的かつ独創的な製造技術を有するメーカーを視察し、高品質なプロダクト製品の製造工程と生産システムについての理解を深めた。

（主な調査先）

- ・(株)タカギセイコー：高岡市／プラスチック製品
- ・三協立山アルミ(株)：高岡市／アルミ建材
- ・三芝硝子(株)：高岡市／ガラス加工

3) 日本の生活様式・伝統文化についての理解

日本の生活様式・伝統文化について、観察や体験をすることで理解を深め、日常の暮らしぶりから日墨の文化比



較の考察を行った。

(主な調査先)

- ・ 京都の文化財
- ・ 祭り(京都祇園祭り、高岡御印祭)
- ・ 秋葉原電気街、築地市場
- ・ 京都国際マンガミュージアム

4) デザイン・アートの潮流を掴む

デザインとアートの「今」を感じ、最新のトレンド状況を掴むため、デザインイベント等の視察を行った。

(主な視察先)

- ・ 東京デザイナーズウィーク 2010
- ・ 瀬戸内国際芸術祭 2010
- ・ GOOD DESIGN EXPO 2010

5. 研修課題の概要およびその成果

前項4. を並行体験する中で、そのインプットを活用し、以下の設定3課題をおおよそ半年かけて展開した。

- (1) 日墨文化比較
- (2) 新たな機器のデザイン
- (3) 自由課題

これらの課題の相互関係は、日墨文化比較に基づいて(1)、相互の文化圏に反映できる新たな生活機器のデザインの開発(2)、加えて彼らが日ごろから温めている個人的なテーマによるもの(3)とした。

1) 日墨文化比較

当初はそれぞれの国の文化的な局面をいくつかの項目(伝統、現代、手作り、量産、ファッションといったもの)で分類しデータベース化するという考えでスタートしたが、高岡での研修以前の約2カ月の大阪語学研修時に味わったカルチャーショックを何らかの形で表現したいというものに変化していった。

それは、量的に膨大なものにならざるを得ない階層構造

の分類体系に基づく考え方ではなく、見た、触った、感じたという人間の五感、すなわち視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚を通して感ずる差としての表現であり、彼らが受けた印象を素直に表現したものとなった。

(1) 視覚

路面電車やバスに見られる色使い(万葉線電車が日本のステレオタイプであるかは疑問)、あるいは寺や教会の装飾の差異など。



(2) 聴覚

祭りに使われる音楽打楽器の違いや地下鉄駅のざわめき。その音色は時には陰と陽にひびく。





(3) 嗅覚

田植後の田んぼとひまわり畑、あるいは地下鉄駅のおいの違い。前者は湿度を持った青いにおいと乾いたひまわりを、後者は臭わない地下街 vs 入り混じった複雑な匂いにその差を感じた。



(4) 触覚

挨拶と食事の箸などの例から、人と人の間に日本には一定程度の距離と空間があり、メキシコにはよりダイレクトな関係がある。



(5) 味覚

酒類やお菓子の比較には、日本の淡白さや、微妙な味わいに対してメキシコはより強く直接的な味の濃さが特徴となる。



来日初期には強く感じたこれらの印象は、研修期間中に徐々に慣れてはきたが、常にその差が気になるものであり、その印象からくる文化の違いが、課題(2)のテーマへとつながっていった。

2) 新たな機器のデザイン

このテーマは前述の日墨文化比較に基づくもので、新しい生活用具の提案を課題としている。両研修員はいずれも、二つの国における人間の距離感の違い、あるいはその行動の差に大きな関心を抱き、それぞれのテーマ展開へとつながっていった。

(1) Antonio のアイデア展開から提案まで

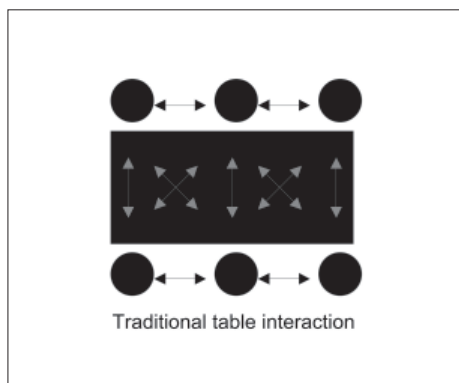
日常的に握手する、ハグしあう外国人に対して、距離を置いて挨拶をする日本人。そういった日本人とメキシコ人の対人的な距離感に強い関心を持つ Antonio は、食事などの場面でよりコミュニケーションの距離を短くするためにはどうすればよいか、からアイデア展開をスタートした。



最終的に選んだ具体案は食事（立食パーティー）における食食用トレーである。

通常立食パーティーは皿、グラス、そして箸とを持ち歩くか、もしくは小さな丸テーブルの周りに集まっての会話といったスタイルが一般的である。

これに対しそれらの煩雑さを解消し、かつ場所を選ばず会場を動き回りながら使用できるトレーによってよりアクティブなコミュニケーションを生み出そうとするものである。

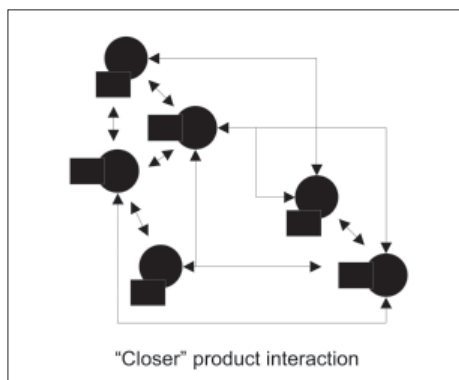


・テーブルディナーのコミュニケーションパターンは、隣どうしや正面が主となる

(2) Fallon のアイデア展開から提案まで

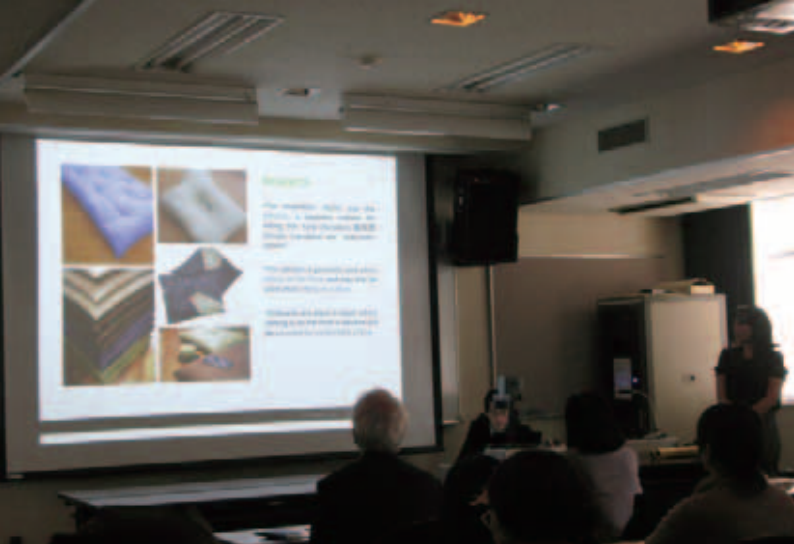
靴を脱ぐ、床に座る、座布団、カジュアルな場での人の距離感などをキーワードとし、座布団を直訳した“seat-cloth-sphere”の考え方からその発展形としての、カジュアルでリラックスした場での多様性を持ったシーティング補助具とした。

最終提案は、4枚が一連となった4個のクッションセットが「コの字」型ケースに収納される。これはクッションがバラバラになることを防ぎかつケース自体も椅子にもなるアイデアである。

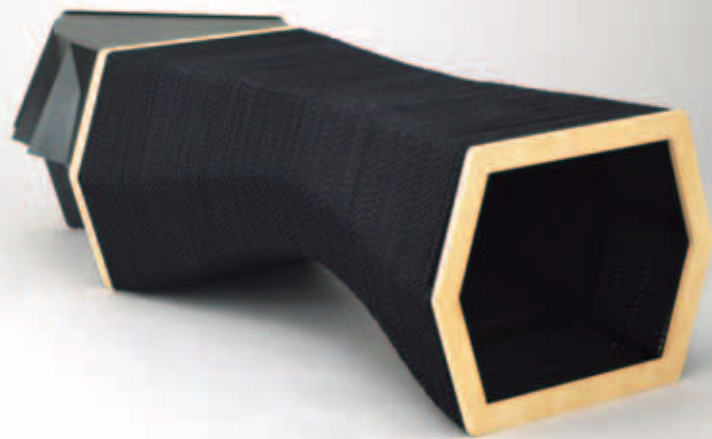
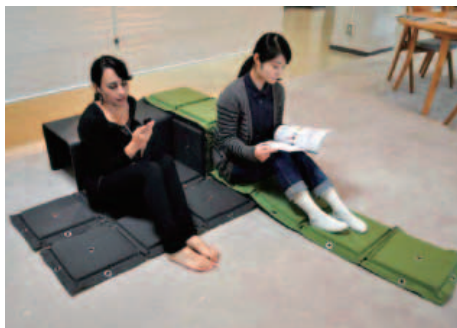


・立食パーティーではより廻遊性のある動きが可能となる





実際の使用シーンは以下のようなものとなるが、形状のシンプルさ、グリーンとダークグレイの組み合わせは、メキシコではよりカラフルな色と柄遣いに変えることで十分にその環境にマッチしたものとする事ができる。



3) 自由課題

すでにデザイナーとして社会経験を持つ彼らが日ごろから温めているものをテーマ設定し具体的な開発を行った。

Antonio はユニット構成で自由なアレンジができるファニチャーシステムを、Fallon は、幼児が自分で扱えるおもちゃ収納の木箱を作成した。

ファニチャーシステムの構造は、スチール製のフレームにロープを巻きつけたデザインで、上下反転することでさらに多様な組み合わせが可能となり、色々な休息シーンを演出できる。



日本で覚えたキーワード「かわいい」をテーマにしたスタッキング構造の木製小箱は、子供たちが自らおもちゃをしまうなどその狙いは完璧であった。





6. 成果全体の評価

1) 独立行政法人国際協力機構 北陸支部の評価

日墨の文化比較に基づくデザイン開発技術の向上という点において、日本の伝統技術、最新技術などをただ見せ、習わせるだけでなく、生活の中に息づくデザインというものを常に意識し、深く考えられた研修であったと思います。また高岡という土地が拠点となったことは研修成果に大きな影響を与えているとも考えています。大都市圏での研修と比べれば、生活に不便を感じることも多いですが、かえって歴史・伝統のみならず、そこに生きる人、もの、環境、全てについて深く感じ、メキシコの実情を振り返り、考える機会を与えていただけた環境であったと研修員の態度・研修成果から感じられました。

また、研修前に日本語研修を受けていたとはいえ、言葉の壁は大きいものです。6ヶ月という長いようで短い研修期間に周囲とどのように関係構築するかは、時に研修員にとって大きな精神的負担となる事があります。ですが、本研修コースでの大学の受入体制においては、研修環境の配慮のみならず、学生を巻き込んだ研修プロジェクト及び生活の支援をいただいたことで、主体性をもちながら、充実した研修生活が送れていたと感じています。(JICA 評価レポートより)

2) 本学における評価

本受託事業は、2006年に次いで2度目の受け入れとなるが、実施プログラムのコンセプトは双方同じであり、今回の成果も前回同様満足できるものであったと自負している。

前回と比較をすれば、メキシコ側に事前に提示する募集要項に、コンセプトをはじめとした詳細なプログラム内容を盛り込んだことにより、募集者がより明確な目的意識を持ち、的確な研修計画がなされていたと思われる。また、中間及び最終プレゼンテーションを早い段階から学内にアナウンス（最終に関しては、今回事前からエントランスホールで作品展示も行った）したこともあり、多くの学生や教職員の方々に参加いただき、多様な意見を頂くことができた。

一方、研修員の多様な要望に応え、研修の質を高めようとするほど、担当教員の負担が増大してしまうなど、いくつかの検討課題も残った。

7. 今後の課題

1) 受け入れ体制

- 設備、什器：おおむね既存のものあるいは学内のものを流用することで対応でき大きな課題はない。
- 教員体制：特別プログラムとして固有の展開としたため言葉の問題を含めて本プロジェクトでの定期、不定期の拘束時間が非常に多く、特に後半での課題制作の個別対応も一般の授業以上に負荷が高いものとなった。
- チューター体制：5名の学生でプロジェクト開発のサポートを行なった。加えて自由時間、休日などは彼らが潤滑剤となることで他学生とのコミュニケーションの増大、近隣の観光案内など十分な成果につながった。

2) プログラム

全プロジェクトを専用のプログラムで実施するのではなく、一部既存の授業を組み入れることが種々の視点からも有効と考えられる。(座学系は言語の課題が残る。本学からの海外留学生においても同様課題がある)

3) プロジェクト開発、遂行

関連メーカーなどへの訪問は、交通手段、言葉の問題から研究員単独では困難であり、大半が教員、チューターが同行せざるを得ない状況で、この面での物理的な負荷を十分に想定しておく必要がある。

4) 住環境 (JICA 手配、準備)

当初の駅近辺のアイデアに対し、大学から徒歩圏（自転車使用）で比較的新しいワンルームアパートとし、結果アパート内、および近隣の学生とのコミュニケーションが生まれ相乗効果を得ることができた。



5) 交流

今回の期間中、他大学からの留学生がラップしなかったが、その機会があればそれなりの場設定によって、さらなる国際交流へとつなげたい。

全体としては人的リソースの課題が大半を占めるが、その負荷を超えて、大学、学生へもたらすものも多く、国際的な融合教育の観点からも2、3年に一度の頻度で継続実施が肝要と判断される。

プロジェクトスタッフ

指導教員

松原 博
矢口 忠憲
内藤 裕孝

チューター

古川 光太 (造形建築科学コース4年)
坂本 恵理 (デザイン工芸コース3年)
鶴見 秀一 (デザイン工芸コース3年)
森下 織香 (デザイン工芸コース3年)
ルブサンチメド セレンゲ (デザイン工芸コース3年)

